

シナイ通信

第30号

平成29年3月31日

NPO 法人 シナイモツゴ郷の会

MAIL shinaimotsugo93ks@ybb.ne.jp

<http://www.geocities.jp/shinaimotsugo284/>

989-4102 宮城県大崎市鹿島台木間塚

字小谷地 504-1 鹿島台公民館内



目次	ページ
表紙 水辺の自然再生共同シンポジウム講演風景	1
2016年下期の活動報告 高橋清孝	2～9
・アメリカザリガニ連続捕獲装置の開発と今後の取り組み	
・シナイモツゴ発見100周年、大崎市誕生10周年記念共同シンポジウム	
里山・里地のゆたかな自然を次世代へ（11/26大崎市開催）報告	
・水辺の自然再生シンポジウム・地域研修会（2/18）	
記念シンポジウムと現地観察会に参加して	小西 繭 10
想いを新たに	小林和子 11
シナイモツゴ里親活動 本年の方針と活動予定	二宮景喜 12
鹿島台小学校の里親活動、県知事から表彰	二宮景喜 13
第9回宝の都・活性化貢献賞受賞	二宮景喜 14
広長地域資源保全隊の受賞 おめでとうございます	二宮景喜 14
里山水辺の昆虫、動物、野鳥	久保田龍二 15
アメリカザリガニ有効利用プロジェクト -ザリガニをおいしくたべよう！	坂本 啓 17
高齢者の仲間入り	安部 寛 18
アメリカザリガニの特異な生態	長谷川政智 19
水辺の仲間たち -その14-	松本憲治 21
シナイモツゴBCC通信の紹介	事務局 23

シナイモツゴ発見 100 周年、大崎市誕生 10 周年記念

水辺の自然再生共同シンポを 11/26 古川で開催

アメリカザリガニ連続捕獲装置全国普及をめざす取り組み開始

大崎市「宝の都（くに）・活性化貢献賞」を受賞 1 月 4 日

2016 年度下期の活動の紹介（10～3 月）

1) アメリカザリガニ連続捕獲装置を全国に紹介

アメリカザリガニは水生植物や貝類などを貪食し水辺の生態系を崩壊させています。アメリカザリガニを防除するためには多くの人手と時間を要するため、全国的に取り組みは限定的です。当会は 2014 年からアメリカザリガニ防除の効率化と省力化を目指し新たな捕獲技術の開発に取り組み、2016 年 8 月にアメリカザリガニ連続捕獲装置を完成させました（シナイ通信 29 号参照）。これを全国へ普及させるため、種々の活動を展開しています。まず、水辺の自然再生シンポジウムなど全国的なイベントで実物を展示、第 64 回日本生態学会大会（早稲田大学 3 月）では口頭発表により紹介しました（J01-05）。次に紹介パンフレット（下図）を作成して関係機関に配布し、当会 HP にも掲載します。また、現在、作成中の新刊本「よみがえる魚たち」（恒星社厚生閣、7 月出版予定）でもだれでもできる簡単技術として詳述しています。さらに、企業と連携して実用化と製品化を進め、ため池など一般的な水域で使用する普及型については供給を開始することが可能になりました（問い合わせ先：東北興商株式会社 TEL022-288-1617）。現在、東京都の公園池などで導入試験を実施中です。この装置の全国普及により、アメリカザリガニの防除の飛躍的な進展が期待されます。

アメリカザリガニ 連続捕獲装置

アメリカザリガニの習性を利用して捕獲効率を高め省力化すると共に耐久性を高めました。水上に設置する自動給餌装置と水面下に設置する捕獲回収装置から成っています。まず、アメリカザリガニの旺盛な食欲を利用し、自動給餌装置を使って A 室に餌を 1 日 1～2 回投与して飽食させて 8 時間の入り口から侵入を促します。次に、アメリカザリガニは危険を察知すると急いで移動する習性があることから、B 室を遮光ネットで暗くすることにより餌を食へ終わったアメリカザリガニを A 室から B 室へ移動させます。入り口は扉状になっていて閉鎖可能で、このため、A 室の水位が低くても、侵入しやすい環境を保持します。毎日、給餌することにより、A 室への侵入と B 室への移動が繰り返されるので、1 週間一度の回収で 100 頭前後（10～20 尾）の捕獲が可能になりました。また、遊樂池として貯水を水面下に設置することにより、遊樂池の底が腐敗も使用できるようになりました。餌はコイ養殖用が選んでいます。本装置は特許申請中です。

捕獲回収装置（水面下に設置）

① A 室（捕獲部）：アメリカザリガニが餌に誘引され侵入する。明るいうらプラスチック製箱。② 餌投入口。左右 2 箇所
③ 仕切りネット：A 室と B 室の仕切り。
④ B 室（回収部）：餌を食へ終わったアメリカザリガニが移動。遮光ネットを貼った暗いコンテナ
⑤ 仕切りネット：A 室を開放したところ、中央のロート状の出口から B 室へ移動する。
⑥ B 室（回収部）：仕切りネットを開放したところ、アメリカザリガニは A 室から B 室へ毎日移動。1 週間一度の作業で 50～200 尾を回収する。

自動給餌装置（水上に設置）

水上に設置し誘引餌を自動的に投与する。自動給餌装置 ① を収容するプラスチック製密閉容器 ② と捕獲回収装置の A 室へ餌を落とすダクト ③ で構成される。

連続捕獲装置は 1 基でアナゴカゴ 6 基以上の機能を発揮します。実証実験では、25 a のため池で 4～5 基を 5 か月間設置しアメリカザリガニを 8～9 割捕獲し低密度管理することができました。この場合の作業時間は 1 週間一度、1 時間程度であり、大幅な省力化が可能になりました。また、水面下に設置する捕獲回収装置を全てプラスチックで作成し耐久性を高めました。これにより長期間の設置が可能となり週 1 回の作業で捕獲作業を周年継続することができるようになりました。

シナイモツゴ 大発生

シナイモツゴがこれまで経験したことが無いほど繁殖しています。アメリカザリガニが減少し、安全に棲寄り形成して産卵できるようになり繁殖成功率が高まっている可能性があります。

年	アメリカザリガニ (個体数)	シナイモツゴ (個体数)
2014年	40	0
2015年	20	10
2016年	10	30

（試験池、2014～2016年、漁具は小型網モドリ）

2,500㎡の試験池に設置した5基の連続捕獲装置
設置期間は20～30a、5ヵ月間でアメリカザリガニ8～9割を捕獲

メダカも増加傾向
試験池ではメダカの群れが増えってきました。アメリカザリガニはカダヤシなど小型魚種を捕食することが知られています。

NPO法人シナイモツゴの会
MAIL: shinaimotoggo@ybb.ne.jp
TEL: 090-4043-3692(高橋)

この資料は財団助成金の助成を受けて制作しました。

2) 大崎市「宝の都（くに）・活性化貢献賞」を受賞

大崎市の活性化に先導的な役割を果たしたと認められる個人や団体等に贈られる賞です。詳細 14P

3) 水辺の自然再生共同シンポジウムとミニシンポジウムを開催

得られた成果の発信と全国の先進的取り組みの紹介を目的に 2 つのシンポジウムを開催しました。11 月 26 日に大崎市古川で開催した共同シンポジウムには全国から 130 名、2 月 18 日に大崎市鹿島台で開催したミニシンポジウム・地域研修会には 45 名が参加しました。

シナイモツゴ発見 100 周年、大崎市誕生 10 周年記念共同シンポジウム

里山・里地水辺のゆたかな自然を次世代へ

開催日時： 2016 年 11 月 26 日（土）9：30～17：00

会場： 宮城県大崎合同庁舎 1F 会議室（宮城県大崎市古川旭 4 丁目）

主催：水辺の自然再生共同シンポジウム実行委員会、NPO 法人シナイモツゴ郷の会、全国ブラックバス防除市民ネットワーク、旧品井沼周辺ため池群自然再生協議会、ナマズのがっこう

後援：宮城県北部地方振興事務所、大崎市、大崎市教育委員会、JA みどりの、
公益財団法人 東洋ゴムグループ環境保護基金

開催趣旨：豊かな自然を次世代へ継承するために、大崎市品井沼の地名を冠する絶滅危惧種シナイモツゴの保全と根本的な対策が急務となっている外来生物対策を中心課題として最新知見の紹介と議論を行う。

次 第

主催者挨拶・趣旨説明 二宮景喜（シナイモツゴ郷の会理事長）

後援団体挨拶 伊藤康志 市長（大崎市）

第 1 部 9：30～12：30 進行 佐藤弘樹（シナイモツゴ郷の会）

シナイモツゴ保全の現状と課題

(1) 全国の生息実態と課題

・小西 繭（信州大）：繁栄と衰退の歴史に学ぶ保全の方向性

(2) 地域における保全の取り組み（15 分×3）

・二宮景喜：旧品井沼周辺の保全活動
・五十嵐正俊（青森やぶなべ会）：青森の生息状況と保全活動

・田村広野・石川訓子（新潟市水族館マリニピア日本海）：水族館での保存活動

(3) 地域ぐるみの保全活動

・西澤誠弘（伸萌ふゆみずたんぼ生産組合 事務局長）：生き物ブランド米と自然再生

・吉田千代志（シナイモツゴ郷の米づくり手の会 会長）：生き物ブランド米でシナイモツゴ生息池を守る

・伊藤芳晴（鹿島台小学校）：里親活動でシナイモツゴを増やす

・平山周作（大崎市産業振興局 局長）：大崎市の取り組み

シナイモツゴ発見100周年・大崎市政10周年記念共同シンポジウム
里山・里地水辺のゆたかな自然を次世代へ

2016年11月26日(土) 9:30~17:00
会場：宮城県大崎合同庁舎（宮城県大崎市古川旭4丁目、JR古川駅から徒歩10分）

第1部 シナイモツゴ保全の現状と課題 9:30-12:15

【全国の生息実態と課題】
繁栄と衰退の歴史に学ぶ保全の方向性 小西 繭（信州大学）

【地域における保全の取り組み】
旧品井沼周辺の保全活動 二宮 景喜（シナイモツゴ郷の会）
青森の生息状況と保全活動 五十嵐 正俊（青森やぶなべ会）
新潟の生息状況と保全活動 田村 広野（新潟市水族館マリニピア日本海）

【地域ぐるみの保全活動】
生き物ブランド米と自然再生 西澤 誠弘（伸萌ふゆみずたんぼ生産組合）
生き物ブランド米でシナイモツゴ生息池を守る 吉田千代志（シナイモツゴ郷の米づくり手の会）
里親活動でシナイモツゴを増やす 鹿島台小学校
大崎市の取り組み 平山 周作（大崎市産業振興局）

【重要な地域の取り組み（コメンテーター講評）】藤本 泰文（伊豆沼・内沼環境保全財団）

【自由討論】 座長：佐藤弘樹（シナイモツゴ郷の会）

第2部 里山・里地のにぎわいをとりもどす外来種の防除 13:30-17:00

【侵略的外来種の効果的な防除をめざして】
オオクチバスとアメリカザリガニの生息域に及ぼす影響 西川 湖（金沢大学）
オオクチバス防除の課題と展望 小林 光（全国ブラックバス防除市民ネットワーク）
里山・里地の水辺における侵略的外来種の総合的防除 菅橋 清孝（シナイモツゴ郷の会）

【急がれるアメリカザリガニ対策】
植物への影響と対策 林 紀男（千歳泉博物館）
水生昆虫への影響と対策 刃部 浩紀（神奈川県博物館）
好氧サイズの人工穴によるアメリカザリガニの捕獲駆除効果の検討 中田 和義（岡山大学）
環境捕獲装置の開発と実用試験 菅橋 清孝・浅野 功・長谷川 敬賢・久保田 龍二（仕作町の会）

【先進的実践事例】
ワシガエルの防除と効果 佐藤 良平（久保川イートープ自然再生協議会）
井の頭公園池のアメリカザリガニ対策 八木 慶（生恵工房）

【侵略的外来種対策と希少魚の保全（コメンテーター講評）】 森 謙一（岐阜経済大学）

【総合討論】 座長：半沢裕子（全国ブラックバス防除市民ネットワーク）

主催：水辺の自然再生共同シンポジウム実行委員会、NPO法人シナイモツゴ郷の会、全国ブラックバス防除市民ネットワーク、旧品井沼周辺ため池群自然再生協議会、ナマズのがっこう 後援：大崎市、大崎市教育委員会、JAみどりの、東洋ゴムグループ環境保護基金
お問い合わせ先 シナイモツゴ郷の会 MAIL: kiyotaka-totokoff.bigfish@nifty.jp

(4) 重要な地域の取り組み（コメンテーター講評）

- ・ 藤本泰文（宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団）

(5) 自由討論（20分）

- ・ 座長 佐藤弘樹（シナイモツゴ郷の会）

第2部 展示 概略説明

- ・ 高橋清孝（シナイモツゴ郷の会）：アメリカザリガニ連続捕獲装置—実物を初公開
- ・ 坂本 啓（シナイモツゴ郷の会）：アメリカザリガニの有効活用—魚醬 V2 など
- ・ 三塚牧夫（ナマズのがっこう）：水田魚道実物の公開展示（屋外広場）

第3部 里山・里地のにぎわいをとりもどす外来種の防除 進行 久保田龍二(シナイモツゴ郷の会)

(1) 侵略的外来種の効果的な防除をめざして

- ・ 西川 潮（金沢大学）：オオクチバスとアメリカザリガニの生態系に及ぼす影響
- ・ 小林 光（全国ブラックバス防除市民ネットワーク）・天野隆雄（三ツ池公園を活用する会）
：オオクチバス防除の課題と展望
- ・ 高橋清孝（シナイモツゴ郷の会）：里山・里地の水辺における侵略的外来種の総合的防除

(2) 急がれるアメリカザリガニ対策

- ・ 林 紀男（千葉県博物館）：植物への影響と対策
- ・ 荻部治紀（神奈川県博物館）：水生昆虫への影響と対策
- ・ 中田和義（岡山大学）：好適サイズの人工巣穴によるアメリカザリガニの捕獲駆除効果の検討
- ・ 高橋清孝・浅野功・長谷川政智・久保田龍二（シナイモツゴ郷の会）：連続捕獲装置の開発と集中捕獲

(3) 先進的实践事例

- ・ 佐藤良平（久保川イーハートープ）：ウシガエルの防除と効果
- ・ 八木 愛（生態工房）：井の頭公園池のアメリカザリガニ対策

(4) 侵略的外来種対策と希少魚の保全（コメンテーター講評） 森 誠一（岐阜経済大学）

(5) 総合討論 座長 半沢裕子（手賀沼水生生物研究会）

開会



講演 第1部 シナイモツゴ保全の現状と課題

進行・自由討論座長 佐藤弘樹（シナイモツゴ郷の会）

地域の宝シナイモツゴを次世代へ引き継ぐため、内外で活動している団体や研究者が水辺の自然再生に関する最新知見や取り組みの実態を紹介した。



講演風景

総合司会 門間氏



① 小西氏 ②二宮氏 ③五十嵐氏 ④田村氏 ⑤西沢氏 ⑥吉田氏 ⑦伊東氏 ⑧平山氏

コメンテーター藤本泰文氏の発言内容



：里地のため池は、管理しながら守る保全体制が不可欠である。管理活動の担い手として、シナイモツゴの保全には複数のため池が必要であることも鑑みると、個人活動ではなく、少なくとも地域住民と専門家が連携した団体活動で守っていく形が望ましい。観光客の増加や消費活動の拡大といった経済活動で算出しやすい成果だけではなく、ボランティア活動といった非営利活動も引き続き組み込んでいく必要がある。

自由討論

1 生き物ブランド米の生産と販売

- ・吉田：新米は売れるが、その後減少、年末年始に再び売れる。販売量は期待する程伸びないが、シナイモツゴを保護しながら新品種の栽培など拡大努力を続けている。
- ・平山：新品種「ささ結」については、追肥せずタンパク含有量を6.5%以下にするなど、品質を一定にして評価を高めるよう努力している。
- ・藤本：いきなり大量販売をめざすと大変なので、できる範囲で取り組み、継続できるようにした方が良い。



2 水族館の取り組み：マリンピア日本海と男鹿水族館 GAO

- ・田村：全国の水族館では連携・分担して貴重な魚類の飼育保存を行っている。
- ・清田（男鹿水族館）：白神山地産シナイモツゴの人工繁殖を行っている。

3 取り組みの課題と展望

- ・五十嵐：活動を継続発展させたい。
- ・二宮：シナイモツゴ発見後100年を経て、環境は大きく変わったが次世代へ継承する取り組みを続けていきたい。
- ・西澤：これまで分散していたふゆみずたんぼを一カ所に集約することで、マガンのねぐら作りを進めたい。
- ・伊藤：シナイモツゴの飼育や池掃除を通じて里親としての自覚が生まれてきた。里親活動を大事にしたい。
- ・平山：大崎市では「おおさき生きものクラブ」事業やNPOなどで様々な活動を行っている。小さな力を組み合わせて、大きな成果を生み出す支援を続けていきたい。

第2部 展示発表

アメリカザリガニ連続捕獲装置と水田魚道の実物を展示



企画者のプレゼンテーション①浅野功 ②坂本啓 ③三塚牧夫



①連続捕獲装置実物展示



②アメリカザリガニ魚醤試食



③水田魚道実物展示

開発中のアメリカザリガニ魚醤の試食

第3部 里山・里地のにぎわいをとりもどす外来種の防除

進行 久保田龍二(シナイモツゴ郷の会)

豊かな自然を守るために最重要課題となっている外来生物対策の新技术や知見を報告した。



講師 ①西川氏 ②小林氏 ③高橋氏 ④林氏
⑤荻部氏 ⑥中田氏 ⑦長谷川氏 ⑧佐藤氏 ⑨八木氏

コメンテーター森誠一氏の発言内容



1 侵略的外来種の影響と対策について多くの報告があり、生態系保全をめざす多様な取り組みが示された。本シンポジウムにより、アメリカザリガニの影響の大きさについてその深刻さを改めて実感し、多様な対策や取り組みについて詳しく知ることができた。

2 アメリカザリガニの防除については①植物、貝類、魚類への影響に関する詳細な報告があった。②連続捕獲装置、人工巣穴、水位攪乱など新技術が紹介され、引き続き効果的な技術の開発が期待される。③ルールづくりのための議論の積み上げが必要である。④ザリガニ魚醤など捕獲物の利活用が紹介され、今後の進展が期待される。

3 防除を効果的に進めるため、プラットフォームを構築し、様々な防除主体が参加できるようにする試みが提案された。また、報告では一般の人が知りえない情報が多く、例えば伊豆沼ではゼニタナゴがかつて数トン漁獲されていたことなどは現在では驚くべき事実である。郷土の貴重な記憶を記録して残すと共に、広く情報提供し、現状を多くの人に理解してもらう必要がある。

総合討論



①総合討論風景 ②座長 半沢氏 ③討議風景

- ・アメリカザリガニを捕獲する上での問題点（混獲）などを議論。
- ・活動を継続するための人員確保について参加者から意見を求めた。
- ・外来種対策のシンポジウムを継続し、さらに、情報交換を目的としたメーリングリストを立ち上げることになった。

シナイモツゴ発見 100 周年・大崎市誕生 10 周年記念
水辺の自然再生シンポジウム・地域研修会

里山の自然と水辺の自然再生

開催日時： 2017 年 2 月 18 日（土）14：15～17：30

会場： 大崎市鹿島台 尾樫会館

主催：シナイモツゴ郷の会、ノーバスネット、旧品井沼周辺ため池群自然再生協議会

開催趣旨：郷土の里山の豊かな自然について学び、保全の在り方について意見交換する。

次 第

- 1) 宍塚の里山まるごと再生に取り組む：及川ひろみ（NPO 宍塚自然と歴史の会）
- 2) 化女沼周辺の植物：高橋和吉（NPO エコパル化女沼）
- 2) 里山水辺の自然再生でよみがえった周辺の小川：高橋清孝（シナイモツゴ郷の会）
- 4) 里山水辺の昆虫、動物、野鳥：久保田 龍二（シナイモツゴ郷の会）
- 5) 里山水辺の植物：安住芳朗（シナイモツゴ郷の会）
- 6) 里山水辺の外来種対策：長谷川 政智（シナイモツゴ郷の会）
- 7) 旧品井沼周辺ため池群に生息するゼニタナゴの遺伝子分析
：池田 実（東北大学大学院）
- 8) ザリガニ魚醬の試食試験：坂本啓（シナイモツゴ郷の会）



会場風景



講演風景



連続捕獲装置の展示

内容

現在取り組んでいる自然再生の活動状況と地域の環境や動植物の生息状況について発表があった。

参加者は、より広い視野の環境保護の必要性および地域の豊かさを認識することができた。

記念シンポジウムと現地観察会に参加して

信州大学理学部 小西 繭

シナイモツゴ発見 100 周年記念シンポジウムでは「繁栄と衰退の歴史に学ぶ保全の方向性」というお題を頂戴し、お話をさせて頂きました。未熟者の私ですので、できれば講演する側ではなく、聴く側の立場で参加したいというのが正直な気持ちでしたが、魅力的なテーマに惹かれ掘り下げて考えてみたくなり、有り難くお引き受けすることにしました。

シンポジウムと翌日の現地観察会に参加し、充実した二日間を過ごさせて頂きました。心より感謝いたします。今回の宮城遠征を通じて、保全活動に参加する「人材のダイバーシティ」がこれからの生物多様性保全のキーワードになると感じました。同志であれば活動のゴールや方向性はある程度共有できるだろうと思いますが、保全を「実現」するためには同志以外の人々の理解や協力を得なければなりません。老若男女、地方と都市、一般市民と専門家、個人と組織がリンクする場である郷の会の活動は、日本社会における生物多様性の価値の底上げのために大切な役割を果たしていると思います。

さて長野市では、シナイモツゴ発見 100 周年を迎えた 2016 年にシナイモツゴとその生息地を守る「ぽんすけ育成会」が誕生しました。歩み始めたばかりの本会ですが、兄貴分である郷の会始め保全活動で活躍されている先輩たちの背中を見ながら、「地域のゆたかな自然を次世代へ」残すべく張り切って活動していきたいと思います。今回のイベントには育成会から 5 名が参加しましたが（写真）、興奮冷めやらぬ我々はホテルで遅くまで話し込んでいました。これを機に末永くお付き合い下さいますようよろしくお願い申し上げます。



写真 シンポジウム会場の入り口にて記念撮影

想いを新たに

ぼんすけ育成会 小林和子

この度 シナイモツゴの郷大崎市制 10 周年シナイモツゴ発見 100 周年記念シンポジウムに参加させて頂き有難うございました。皆さまからたくさんの事を学ばせていただきましたし、行政と地域が一体となって活躍しているのはとても羨ましく思いました。

私の住む信里地区は 長野市西南部 北アルプスを源流とする犀川沿いの丘隆地帯です。日本重要湿地 500 にも茶臼山周辺溜池群として登録されています。1 戸に 1 個以上有ると言われる溜池は、農業最盛期には 800 個ほどでしたが 現在はおよそ 400。そのうちの 30 箇所にシナイモツゴが生息しています。

昔から天水を利用したコメが主産物でしたから溜池やそこに棲む生物はとても身近な存在でした。蛋白源としてコイやフナを飼いました。また池のカエルやヨシノボリ(カジカとよびました)シナイモツゴなどは子供の遊び相手でもありました。シナイモツゴが[ポン]と呼ばれたのは、潰したタニシを糸で結んで水中に入れると針が無くてもすぐ釣れて



しまう事や、コイやフナを釣りたいのに先ずポンが釣れてしまい困り者だというのも有ったようです。又 コイ科なので餌を食べる時の音がポンと聞こえたからという説もあります。捕獲されたものは甘辛く煮て食べました。そのようにポンはとても身近な存在だったのです。

戦後化学肥料の使用や農業の機械化・基盤整備などポンの住みにくい環境の変化で長野県の何処にでもいたポンは絶滅しました。ただ奇跡的に我が信里でだけ生き延びていたのです(栄村や上田市では施設や村有池で保護されています)。ポンは強い魚で環境が悪くても生きられるようなのですが いずこもポンでさえ生きられない環境になりつつあるのかと溜め息が出る思いです。

一昨年 研究者の小西さんにこのままでは信里のポン絶滅も時間の問題との情報を頂き、友人達と保全の会を立ち上げました。

ぼんすけ育成会と名付けた会の講演会において

下さった信大名誉教授の藤山先生が、この会は女性が活躍する特異な会だとおっしゃいました。そう言えば会長も事務局も研究者も女性です。生命を産み育てる女性だからこそその目線もあるかもしれません。活動をしっかり支えてくれる男衆と安心して走り回っている私達。80 歳台のお年寄りからも身近にいるポンの情報が届けられるようになりました。小学校では小西先生が児童と希少種保護の勉強をしています。世代を越えてみんなで護りたい[ぼんすけ]です。



シナイモツゴの郷の皆さま 今後とも宜しくお願い致します。

シナイモツゴ里親活動 本年の方針と活動予定

シナイモツゴ郷の会 二宮 景喜

まもなくシナイモツゴの繁殖の準備を始める時期がやってきます。本会の存続する所以となる活動の一つであり、毎年きちんとやり遂げることが、我々に課された使命であると考えています。しかし、増殖活動に今まで従事してきた会員の高齢化などで人手の確保が難しくなってきました。新しいメンバーの参加をお願いしたり、日程の見直し、作業の効率化などを進め、今までの活動を継続できるように努力したいと考えています。

今年の方針ですが、増殖は小学校の里親活動を中心に組み立てられていますので、今年も昨年の体制を継続して、確実に進めていきたいと思えます。現在の里親校、鹿島台小学校、鳴瀬桜華小学校、小牛田小学校、石巻開北小学校を4月24日に訪問し、今年も里親活動を継続していただくことで各校と合意しています。今年の方針の検討もお願いしてきましたが、昨年と同じ時期にほぼ同じ内容で実施する方向で検討していただくことになっています。ご参考までに、昨年の里親校にかかわる実施内容と日時について記しておきます。

〔昨年の実施内容と日時〕

- ・事前学習 鹿島台小（4年生 昨年5月26日）鳴瀬桜華小（4年生 昨年5月25日）
小牛田小（5年生 昨年5月30日）開北小（5年生）
- ・シナイモツゴの回収及び池掃除
鹿島台小（約2時間 昨年6月3日）鳴瀬桜華小（授業と合わせて約2時間）
小牛田小・開北小（学校に一任）
- ・繁殖のための産卵ポット・液肥・GWの作業及び手順
5月下旬 産卵ポットの準備及び設置
6月1日～ 塩釜丹野さんに液肥、GWの製造を依頼
6月1日～6日ごろ 各校の池に液肥、GW投入
池の掃除後1～2日間天日干しを行い、注水完了後に投入
液肥、GW投入後、植物プランクトンの発生状況を見る。（1週間ほど）
- ・里親校への発眼卵の移入
6月10日ごろより 子どもたちが発眼卵を観察できるように日程調整をする。
- ・孵化前後の注意事項の連絡と観察・餌やりなどの指導

本年の活動日程については、各校との調整がつき次第、BCC通信などでお知らせしますので、活動の継続を確かなものにするためにも、会員皆様の積極的なご参加をいただきたいと思います。

シナイ通信の前号で、田尻にあるケミコン宮城（株）さんも企業としては初めて、シナイモツゴの里親活動を開始することをお知らせしましたが、今年は本格的に卵からの繁殖を試みます。ガラス水槽でも飼育する二様の対応を取りますが、小学校とは違った意味で、社会的にインパクトのある環境保全活動に発展させていただきたいと期待しているところです。

尚、恒例のシナイモツゴの放流会は、昨年の堤防改良を機にブラックバスを駆除した貝抜沢ため池で行うことを検討しています。また大崎生きものクラブの活動のうち、例年本会が担当している「川の生きもの調査」は6月17日（土）に実施します。川の生きもの調査（広長川）・学習会・昼食（学童農園）と例年ほぼ同じ内容ですが、子供たちの間で人気が高く、今年も多く参加者があると思いますので、本会の皆様にも参加をお願いします。

鹿島台小学校の里親活動、県知事から表彰

シナイモツゴ郷の会 二宮 景喜

鹿島台小学校は長年シナイモツゴの里親として活動していることはご存知と思いますが、このたび、生物多様性を推進するための優れた学校活動として、宮城県知事から表彰されました。

1月30日に仙台市のホテル白萩を会場にした宮城県主催の生物多様性シンポジウム『みやぎの山と私たちの暮らし』の



席上、表彰式が行われ、今年を受賞校4校のトップに鹿島台小学校を代表して、4年生の鈴木絵葉さんと佐藤菜々夏さんが、佐野環境生活部長から表彰状を受け取りました。



表彰後、各校の活動紹介が行われ、二人はスライドを使い、「里親活動でシナイモツゴを増やす」と題して鹿島台小学校の取り組みを説明、はきはきとした元気なプレゼンテーションに会場から大きな拍手がわきました。

この表彰と一緒に活動している私たち郷の会にとっても大きな喜びです。

第9回宝の都・活性化貢献賞受賞

シナイモツゴ郷の会 二宮 景喜

大崎市から宝の都（くに）・活性化貢献賞をいただきました。大崎市には、市民活動の一層の普及、創意と工夫による個性ある地域活動を促進することを目的に、先導的な



役割を果たしている個人や団体を表彰する規定があり、今年度は本会がほかの5団体とともに表彰を受けることになりました。大変光栄に思っています。これも会員の皆さんの日ごろの努力があつてのことと思ひ、また地域の方々にもいつもご協力をいただいておりますので、地域ぐるみみんなでいただいたものと考えております。

賞の贈呈式は1月4日に大崎市古川の芙蓉閣で行われ、二宮と高橋が登壇、大崎市長から賞のトロフィーをいただきました。その後、短いスピーチでしたが感謝と今後も努力する旨申し上げてきました。

広長地域資源保全隊の受賞 おめでとうございます

シナイモツゴ郷の会 二宮 景喜

2月15日 大和町のまほろばホールで開かれた『農村振興研修会』（宮城県及び多面的機能支払推進協議会主催）の席上で、『平成28年度多面的機能支払活動組織優良表彰』の表彰式が行われ、広長地域資源保全隊が見事「農村環境保全活動賞」を受賞しました。この表彰は、5年ぶりとのことで、7つの分野に分けて選考が行われ、多数の応募の中から厳しい選考の末に選ばれたとのことです。

地域の共同活動や少子化・高齢化への対策の中で、ため池や水路の整備に力を入れ、良好な自然環境を守るために、ブラックバスを駆除しながら、シナイモツゴの棲むきれいなため池の水を利用した米つくりの努力などが評価されました。

シナイモツゴ郷の米つくり手の会の吉田会長さんは、この賞はもっとも希望していたものだと思っておられました。郷の会も広長地区の方たちに大変お世話になっております。今後、私たちも可能な限り、協力してまいりたいと思ひます。

里山水辺の昆虫、

動物、野鳥

久保田 龍二

宮城県鹿島台地区では、1993年にシナイモツゴが60年ぶりに再発見されました。周辺ため池には旧品井沼にかつて生息していたであろうシナイモツゴやゼニタナゴなど希少な淡水魚が現在でも生息しています。シナイモツゴ郷の会では、これら希少な淡水魚の保護活動等を行っているのはご承知のとおりかと思えます。

これまで生息する魚類や貝類及び甲殻類などは当会により調査がなされていますが、その他の生き物については記録や写真が少なかったため、平成28年度に実施した高橋忠会員による鳥類調査と保護活動時に久保田が確認した鳥類、両生類、爬虫類、哺乳類、昆虫類、その他生物をここにまとめました。なお、鳥類以外の生物については、活動の合間に確認されたものだけであることを付け加えておきます。

各動物の確認状況は、鳥類は13目28科59種が確認され、夏鳥ではホトトギス、ツバメ、ヤブサメ、キビタキの4種、冬鳥はマガモ、コガモ、キンクロハジロ、スズガモなどのカモ類、ツグミ、ジョウビタキ、マヒワ、ベニマアシコ、シメ、カシラダカなど14種であり、その他41種は通年で生息している留鳥であり、キジバト、コゲラ、アカゲラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、スズメ、ホオジロなど里山周辺に一般的に生息する鳥が多く確認された他、アオサギ、ダイサギ、カワセミなどの水辺の鳥、またノスリ、ハイタカ、ハヤブサなどの猛禽類なども確認されました。

両生類は2目3科5種で確認種は、クロサンショウウオ、ニホンアマガエル、ニホンア

カガエル、ウシガエル、トウキョウダルマガエル、爬虫類は1目2科3種で確認種はニホンカナヘビ、シマヘビ、ヤマカガシ、哺乳類は4目5科5種で確認種はアズマモグラ(塚・坑道)、ニホンリス(食痕)、タヌキ(足跡)、ニホンアナグマ(堀返し)、カモシカ(目撃)などが確認されました。

昆虫類は9目34科68種で確認種は、池の水辺ではモノサシトンボ、ギンヤンマ、アキアカネなどのトンボ類、堰堤の草地ではベニシジミ、ウラギンヒョウモン、カラスアゲハ、ジャノメチョウなどのチョウ類、オンブバッタ、ヤブキリなどのバッタ類、周辺樹林地ではカブトムシ、ノコギリクワガタ、ミヤマカミキリなどのコウチュウ類、キイロスズメバチなどのハチ類が確認されました。

鳥類確認種リスト

No.	目名	科名	種名	渡り区分	K	I	周辺
1	キジ目	キジ科	コジユケイ	留鳥	○		
2			キジ	留鳥	○	○	
3	カモ目	カモ科	マガモ	冬鳥			○
4			オオハクチョウ	冬鳥	○		○
5			ヒドリガモ	冬鳥		○	
6			マガモ	冬鳥		○	
7			カルガモ	留鳥		○	
8			コガモ	冬鳥	○	○	
9			ホシハジロ	冬鳥		○	
10			キンクロハジロ	冬鳥	○	○	
11			スズガモ	冬鳥	○	○	
12	カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ	留鳥	○	○	
13	ハト目	ハト科	キジバト	留鳥	○	○	
14	カツオドリ目	ウ科	カワウ	留鳥	○		
15	ペリカン目	サギ科	アオサギ	留鳥	○	○	
16			ダイサギ	留鳥	○	○	
17	ツル目	クイナ科	バン	留鳥		○	
18			オオバン	留鳥		○	
19	カッコウ目	カッコウ科	ホトトギス	夏鳥	○		
20	タカ目	ミサゴ科	ミサゴ	留鳥	○		
21		タカ科	トビ	留鳥	○	○	
22			ハイタカ	留鳥			○
23			ノスリ	留鳥	○	○	
24	ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ	留鳥	○	○	
25	キツツキ目	キツツキ科	コゲラ	留鳥	○	○	
26			アカゲラ	留鳥	○	○	
27			アオゲラ	留鳥	○		
28	ハヤブサ目	ハヤブサ科	チョウゲンボウ	留鳥	○		
29			ハヤブサ	留鳥	○		
30	スズメ目	モズ科	モズ	留鳥	○	○	
31		カラス科	カケス	留鳥	○	○	
32			ハシボソガラス	留鳥	○	○	
33			ハシブトガラス	留鳥	○	○	
34		キクイタダキ科	キクイタダキ	留鳥	○	○	
35		シジュウカラ科	コガラ	留鳥	○	○	
36			ヤマガラ	留鳥	○		
37			ヒガラ	留鳥	○	○	
38			シジュウカラ	留鳥	○	○	
39		ツバメ科	ツバメ	夏鳥	○	○	
40		ヒヨドリ科	ヒヨドリ	留鳥	○	○	
41		ウグイス科	ウグイス	留鳥	○	○	
42			ヤブサメ	夏鳥	○		
43		エナガ科	エナガ	留鳥	○	○	
44		メジロ科	メジロ	留鳥	○	○	
45		ムクドリ科	ムクドリ	留鳥	○	○	
46		ヒタキ科	ツグミ	冬鳥	○	○	
47			ジョウビタキ	冬鳥	○	○	
48			キビタキ	夏鳥	○		
49		スズメ科	スズメ	留鳥	○	○	
50		セキレイ科	キセキレイ	留鳥	○	○	
51			ハクセキレイ	留鳥	○	○	
52			セグロセキレイ	留鳥	○	○	
53		アトリ科	カワラヒワ	留鳥	○	○	
54			マヒワ	冬鳥		○	
55			ベニマシコ	冬鳥	○	○	
56			シメ	冬鳥	○		
57		ホオジロ科	ホオジロ	留鳥	○	○	
58			カシラダカ	冬鳥	○	○	
59			アオジ	留鳥	○		
	13目	28科	59種	—	49種	43種	3種

【昆虫類】

				
オオイトトンボ	ホソミオツネトンボ	モノサシトンボ	オオヤマトンボ	ギンヤンマ
				
オナガアゲハ	イチモンジセセリ	ジャノメチョウ	ツバメシジミ	ベニシジミ
				
カブトムシ	ミヤマクワガタ	アオカナブン	ミヤマカミキリ	マメコガネ

【鳥類】

				
ダイサギ	ミサゴ	ノスリ	ハクセキレイ	カワラヒワ
				
キジバト	ムクドリ	カシラダカ	マガモ	カワセミ

【両生・爬虫類】

				
クロサンショウウオ	ニホンアカガエル	トウキョウダルマガエル	ニホンアマガエル	ニホンカナヘビ

【哺乳類】

				
カモシカ	タヌキ(足跡)	ニホンリス(食痕)	アナグマ(堀返し)	アズマモグラ(塚)

<アメリカザリガニ有効利用プロジェクト>

ザリガニをおいしくたべよう！！

坂本 啓（シナイモツゴ郷の会）

このプロジェクトでは、ため池の厄介者であるアメリカザリガニ（以下ザリガニと言う）の有効利用の可能性を模索し、得られた知見をもとにザリガニ駆除の必要性をPRすること、またザリガニを原料とした加工食品を開発・商品化して駆除費用等の一助とすることを目的としています。ザリガニの有効利用の計画は大きく4つに分かれます。

1つ目は発酵部門。これはザリガニが持つ甲殻類特有の風味を活かし、ザリガニ魚醤を作ろうと言うものです。昨年度から製作に取り組んでおりますが、平成28年度は美里町にある鎌田醤油（株）さんから麴を購入し、原料のザリガニに塩と麴を添加したザリガニ魚醤を仕込みました。一部の試験区で腐敗・カビが発生してしまいましたが、発生しなかった魚醤では、5ヶ月経過時点で塩角が取れて味がまろやかになり、大豆の醤油に近い色合いとなりました。

2つ目は乾燥加工部門。こちらはザリガニを原料として、常温で長期間保存可能なせんべいなどの加工品の開発を目指しています。平成28年度は宮城県水産技術総合センターの煎餅焼き機を借用し、試作を行いました。稚ザリガニを姿そのままのせたせんべい等、インパクトがあるものが出来ていますが、もう少し生地的配合や加工工程を検討・改良していきたいと思っています。

3つ目は調理部門。こちらは加工品ではなく、一般家庭でも美味しく食べられる方法、レシピなどの収集・開発に取り組むものです。平成28年度は「ザリガニサラダ」「ザリガニパスタ」「ザリガニのにんにく炒め」を試作しました。特に「ザリガニサラダ」は好評で、昨秋のシンポジウムでも試食提供しています。今後はレシ



ザリガニ魚醤のろ過



せんべいの試作



ザリガニのサラダと塩ゆで

ピ集などを作成できればと思っています。

4つ目は餌料利用部門。こちらは残渣として残ってしまうザリガニの殻やハサミなどの有効利用を模索するものです。現時点でまだ取り組めていないのですが、鶏卵の色揚げなどに利用できないか等を検討していく予定です。

まだまだ開発途中ですが、いつかザリガニの料理や加工品で盛大な「ザリガニパーティ」を開くことを夢見ながら、頑張りたいと思います。また、一緒に加工・調理をしてくれるメンバーも募集しておりますので、ご興味ある方は坂本までご連絡ください。

高齢者の仲間入り

シナイモツゴ郷の会 安部 寛

東日本大震災から6年が経ちますが、福島原発は、まだまだ心配です。

我々高齢者はしかたないとしても孫の世代は、どうなるか心配です。

シナイモツゴ郷の会活動は、高齢者が主体となってため池の自然再生（シナイモツゴとゼニタナゴの生息拡大）を行っています。

これからの活動には、仲間の**健康維持増進**と仲間の**輪を広げる**ことが必要です。

私はメタボ予備軍なので体重が増えない様に次の項目を日課にしています。

- 1、 起床後、ラジオ体操
- 2、 起床後、体重測定
- 3、 血圧測定（起床後、就床前）
- 4、 にんじんリンゴジュースを飲む。
- 5、 朝食後、血圧を下げる薬を飲む。
- 6、 ウォーキング1日8,000歩

皆さん、**健康第一で無理せずに活動**しましょう。

高齢者の交通事故が増えています。**安全運転**で行きましょう。

皆さんと一緒に**仲間の輪を広げ**ましょう。

最後に一句、「**高齢者、仲間と集えば若返る**」

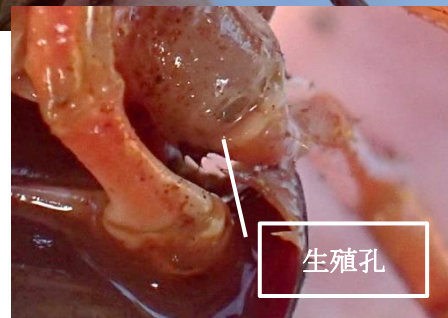
アメリカザリガニの特異な生態

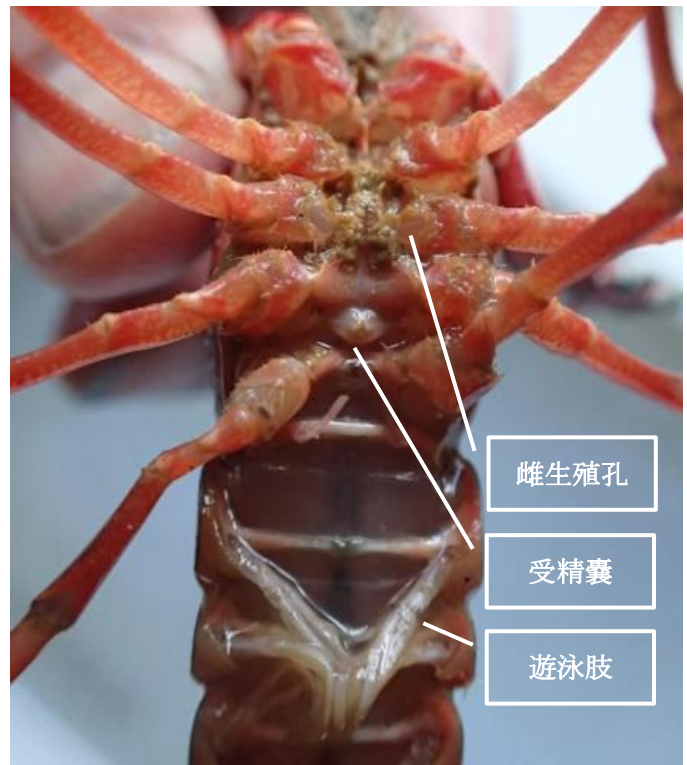
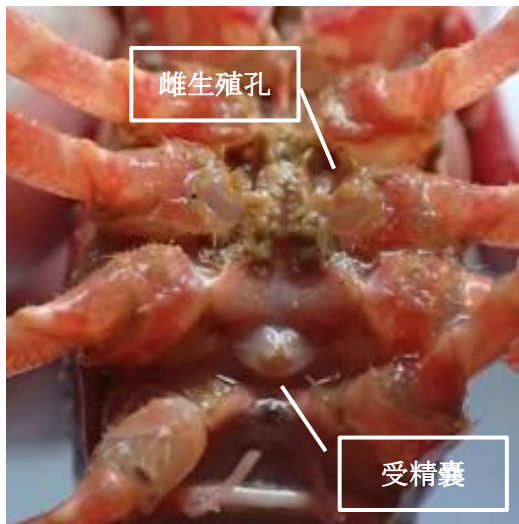
シナイモツゴ郷の会 長谷川 政智

日本のアメリカザリガニは、昭和2年(1927年)アメリカ合衆国レイジアナ州から持ち帰られた20尾に由来していると考えられている。当時、ウシガエルの養殖事業のためそのエサとしてアメリカザリガニを繁殖させたものの、その後、ウシガエル養殖は閉鎖され、その時逃亡したものが水路、田んぼで繁殖しその後各地に広がったとされている。今から40年以上前、私の幼少期には、アメリカザリガニのことをエビガニと呼んで水路や池でよくエビガニ釣りをやっていたが、当時から稲を切り畔に穴をあけるなど稲作農家にとっては厄介者であった。現在では、環境省及び農林水産省が作成する生態系被害防止外来種リストで緊急対策外来種に指定され、各地では駆除活動が行なわれるなど悪名度はかなり上がった。郷の会でも2014年からアメリカザリガニの駆除活動を実施しているがその生態については知らないことだらけだった。

アメリカザリガニ駆除では回収部の捕獲容器の中に白い石のようなものが入っている時がある。最初はこれが何か分からなかったが芦沢会員から胃石であることを教わった。脱皮直後の外皮が柔かな個体が食べられ、胃石だけが残ったということである。1尾に大抵2個あり、胃石の数で食べられた個体数を推定できるようだ。胃石とは、脱皮前に固い外皮からカルシウムが胃の中に集められ形成された直径10mm程度の白色ペレット状の塊で飲み薬の錠剤に似ている。脱皮の後は新しい外皮を固くするために胃石からカルシウムが送られる。胃石が見られるのは春から秋で特に6~7月に多いように感じた。

アメリカザリガニ雌雄の見分け方はなじみのない人には?マークが付く。幼いころアメリカザリガニ釣りに明け暮れた筆者は、雌雄の見分けは誰でもできるものと思っていたがそうでもないらしい。アメリカザリガニが若く小さい時には見分けがつかなく成長すると体に大きな変化が現れてくる。雄は交尾器が大きくな



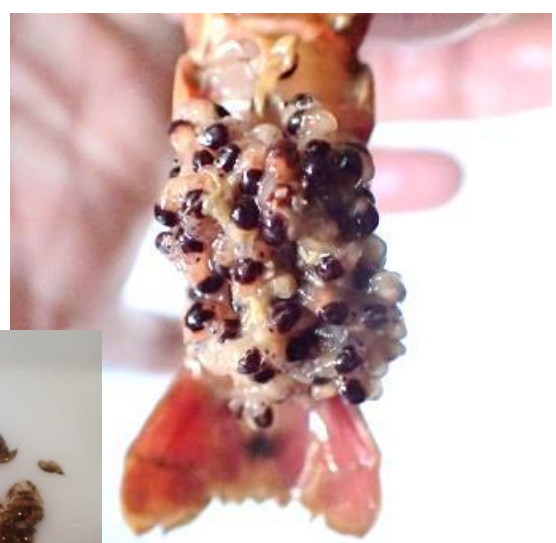


ること簡単に見分けられる。交尾器は、生殖孔からでた精子を運ぶ役目をするもので哺乳類と違う。また、成熟した雄には歩脚の付け根付近にとげ状の突起が現れ、交尾の際にこの突起をうまく利用するよ

うだ。雌には当然交尾器はなくその代わり雄の精子を入れる受精囊（じゅせいのう）がある。交尾後すぐに産卵は行われず、40日から90日もたってから産卵するといわれている。産卵する時は雌の生殖孔から卵が生み出され、受精囊からでた精子と受精し卵が腹部の遊泳肢に付着する。成熟した雌の遊泳肢は卵を付着させるため長く発達する。

産卵数は、二ホンザリガニが30~60粒であるのに対しアメリカザリガニは200~1000粒と言われる。産卵後は卵をお腹に抱え、卵が孵化した後も稚ザリをお腹に抱えたままで過ごし、稚ザリが独立するまでお腹で育てる。毎年1尾の雌親が何百もの稚ザリを効率よく育てることを考えると数年で池がアメリカザリガニだらけになっても不思議ではない気がする。

最後に、アメリカザリガニについてもっと詳しく知りたい方、生態に興味をお持ちの方、自然再生に参加したい方など、私たちと一緒に活動をしてみませんか？



水辺の仲間たち —その14—

うみの杜水族館 松本 憲治

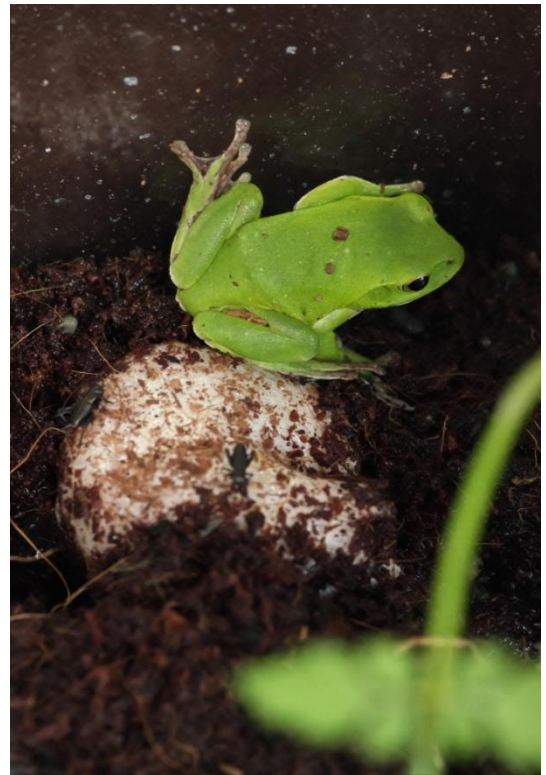
桜が盛りを過ぎ、田んぼに水が張られる季節になるとゲーゲーグワグワ、コロコロカラカラと蛙の音が聞こえてきます。この時期ほとんどこの田んぼでも聞こえてくる蛙の声は2種類あるのに気づくでしょうか？ゲーゲー鳴いているのはお馴染みニホンアマガエルです。そしてコロコロと甲高い方の声の持ち主が今回ご紹介するシュレーゲルアオガエル *Rhacophorus schlegelii*(Günther, 1858)です。声は誰でも聞いたことがあると思いますが、見たことのある人は意外と少ない蛙であると思



ます。それもそのはず田んぼでのシュレーゲルアオガエルは畦などの地中やコケの下に潜り込んで鳴いていることが多いのです。見つけるポイントは田んぼの中よりも周りの草むらを探してみるこ

とです。個体数の多いところなら草を掻き分けていくとニホンアマガエルに似ているがそれより明らかに大きい蛙がピョコピョコと跳びだしてくるはず。彼らは本来湿地の草むらや藪に生息する種類なのです。だから産卵の時や水分を補給する時以外は水中にいることはほとんどありません。

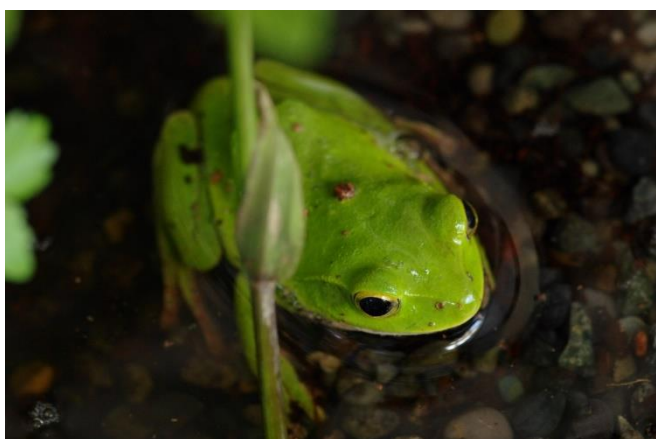
実はこのことが彼らやニホンアマガエルが「お馴染みの蛙」である理由なのです。かつては田んぼで多くみられたトウキョウダルマガエル(トノサマガエルの近縁種、宮城県ではほとんどがトウキョウダルマガエルです)やツチガエル(いわゆるイボガエル)などは水辺から離れることが無く、圃場整備が進み乾田化された田んぼでは生きていくのが難しいのですが、シュレーゲルアオガエルやニホンアマガエルは乾燥に強く、田んぼに水が無くなっても脇の草むらや林の中などで生きられるのです。またツチガエルなどより産卵の時期やオタマジャクシの成長がはやく、田んぼの中干しの前にカエルになって上陸してしまうのも生き残っている理由だと思われます。もちろんトウキョウダルマもツチガエルも田んぼだけに棲んでいるわけではないのですが、有史以来我が国では



シュレーゲルアオガエルの泡巣

平地の湿地はことごとく田んぼに開発されてしまっているのです、彼らの生きていけるスペースはどんどん減ってきてしまっているのが現状です。 シュレーゲルアオガエルはアオガエル科に属する蛙です。宮城県にはこの科に属する蛙が3種類分布しています。一つは夏の夜に虫の音の様な美しい声で鳴くカジカガエル、もう一つは樹上に泡の塊を造り、そこに産卵するモリアオガエルです。特にモリアオガエルは同じアオガエル属 (*Rhacophorus*) で姿も良く似ています。ただしシュレーゲルの体長はオスで3~4 cm、メスで4~5 cm、モリの体長はオスで4~6 cm、メスで6~8 cmとモリアオガエルの方がより大型です。モリアオガエルは樹上で産卵するため泡巣が良く目立ちますが、シュレーゲルアオガエルも地中に泡巣を造りそこに産卵します。まれに田んぼの畔でも見ることができます。

シュレーゲルアオガエルという名前は何か外來種っぽいですがれっきとした日本固有種です。名前はオランダのライデン王立自然史博物館の第二代館長ヘルマン・シュレーゲル (Hermann Schlegel 1804. 6. 10-1884. 1. 17) に由来します。ライデン博物館と聞いてピンと来た人もいるかもしれませんが、その通り、あの幕末の有名人、シーボルト (Philipp Franz Balthasar von Siebold 1796. 2. 17-1866. 10. 18) が持ち帰った標本から新種記載されました。ただ命名者は大英博物館のアルベルト・ギュンター (Albert Karl Ludwig Gotthilf Günther または Albert Charles Lewis Gotthilf



左上 シュレーゲルアオガエル
 右上 ニホンアマガエル
 左 モリアオガエル
 シュレーゲルに比べると虹彩
 に赤みがかかる

Günther 1830. 10. 3-1914. 2. 1)で模式標本も大英博物館に保管されているそうです。シーボルトが持ち帰ったニホンアマガエルの標本の中に本種が混じっていたそうです。なるほど両者は同じような場所に生息しており、よく似て

います。成長すれば明らかにシュレーゲルアオガエルの方が大きいのですが、もちろん同じような大きさの個体もあります。しかし見分けは意外と簡単で、頭部を横から見れば一目瞭然です。ニホンアマガエルには眼の周囲に黒いラインが入りますが、シュレーゲルアオガエルにはそれが無く緑一色です。

先にシュレーゲルを見つけるならば、という話をしましたが本種に限らず地上棲の蛙を見つけるなら朝夕や雨上がりなど湿度が高まった時間をお勧めします。シュレーゲルアオガエルはニホンアマガエルと比べても昼日中から鳴く傾向が強いですが、湿度が低いうちは地中から地表に出てきていないことが多いので見づかり難いのです。ここまでいろいろ書いてきた筆者ですが、実はシュレーゲルアオガエルを初めて見たのは大人になってからでした。一度自分の目で見つけてしまえば以後は割と簡単に見つけることができるようになるものですが、初めての時は感動しました。皆さんもこの鮮やかな緑色の美しい蛙をぜひ探してみてください。でもくれぐれも田んぼの蛙などを壊さないように注意して！

シナイモツゴ BCC 通信 293号 (2017年3月22日配信)

会員の情報共有のための配信メール(1~3回/月)です。受信ご希望の方はご連絡下さい。

みなさま

梅が咲き、スイセンのつぼみも大きくなり、ため池ではニホンアカガエルが産卵を始めました。

4月から本格的な活動を再開しますので、奮ってご参加ください。

イベント情報

1 ゼニタナゴ繁殖調査

4月8日(土) 9:00 中核ため池集合

2 アメリカザリガニ防除試験

毎週土曜日、中核ため池で9:00から実施中。

3 移動研修会

<日時・参加費>

平成29年4月29日(土) 8:45 鹿島台鎌田記念ホール駐車場集合

会員参加費：大人2,000円、小中高校生1,500円、幼児(4歳以上)500円

一般参加費*：大人4,200円、中高校生3,800円、小学生3,300円、幼児(4歳以上)1,000円

参加費は入場料、昼食代、保険料、交通費などを含みます。参加申し込み時に賛助会員(年会費1,000円)として入会できます。会員家族の中で高校生を除く18才以上の方は一般参加となります。定員30名 定員に達した段階で締め切ります。

<内容>

“復興を象徴する水族館“をコンセプトに掲げる「うみの杜水族館」にて豊かな三陸の海を感じると共に、シナイモツゴ郷の会でも展示協力しているシナイモツゴなどの希少淡水魚の飼育状況など見学する。また、周辺の蒲生干潟の自然再生状況や七ヶ浜の復興・海岸整備状況などを視察します。

<行先・スケジュール>

08:45 鹿島台集合(鎌田記念ホール駐車場)

09:00~09:45 出発~移動

09:45~11:45 うみの杜水族館到着~見学

12:00~13:00 キリンビアポート仙台にて昼食(ランチセット)

13:15~13:45 菊地先生に解説していただきながら蒲生干潟を見学

14:15~14:30 菖蒲田浜海岸の視察

14:40~15:10 七ヶ浜うみの駅“七のや”で買い物など

15:10~16:00 帰途→鹿島台到着

<申し込み先> 二宮理事長

ninomiyaakeiki@cup.ocn.ne.jp

4 定例会理事会

期日：4月29日(土)

会場：移動研修会休憩時間

5 定例会理事会(毎月第3土曜日)

2016年5月20日(土) 18:00~

鹿島台

シナイはアイヌ語で大きな川(沢)を意味します。

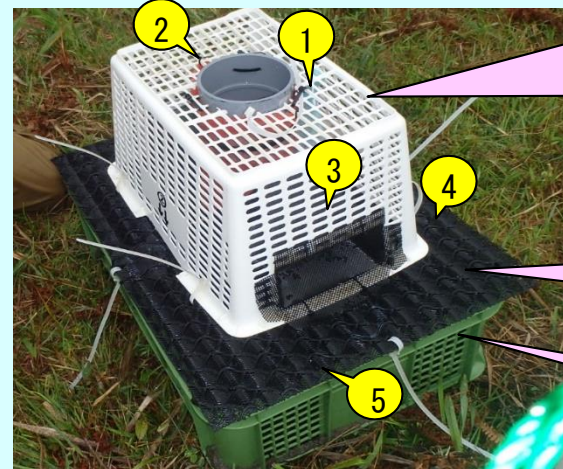
小さな流れが大きな川になるように地道な活動を続けていきましょう。

アメリカザリガニ 連続捕獲装置

アメリカザリガニが繁殖した池や沼では水生植物や動物が全滅あるいは減少し水質が悪化しています。

アメリカザリガニの捕獲作業を省力化するため本装置を開発しました。アメリカザリガニの旺盛な食欲を利用し自動給餌器でA室に餌を1日1~2回投与して蝟集させ、側面の入口から侵入を促します。アメリカザリガニには危険を察知すると暗い方へ移動する習性があることから、B室を遮光ネットで暗くし餌を食べ終わったアメリカザリガニをA室からB室へ移動させます。これによりA室の生息密度を常に低く保ち、侵入しやすくしています。毎日給餌を続けることでA室への侵入とB室への移動が繰り返されるので、1週間に一度の回収で100尾前後（50~200尾）の捕獲が可能になりました。また、2階構造としてA室を水面近くに設置することにより、透明度の低い水域でも使用できるようになりました。餌はコイ養殖餌が適しています。本装置は特許申請中です。

捕獲回収装置（水面下に設置）



①A室（捕獲部）：
アメリカザリガニが餌に誘引され侵入する。明るいプラスチック製箱。**②餌投入口** **③**侵入口。左右2個

④ 仕切りネット：
A室とB室の仕切り。

⑤ B室（回収部）：
餌を食べ終わったアメリカザリガニが移動。遮光ネットを貼った暗いコンテナ。



④ 仕切りネット：
A室を開放したところ。中央のロート状の出口からB室へ移動する。



⑤B室（回収部）：
仕切りネットを開放したところ。アメリカザリガニはA室からB室へ毎日移動。1週間に一度の作業で50~200尾（平均100尾）を回収する。

自動給餌装置（水上に設置）



①
水上に設置し誘引餌を自動的に投与する。自動給餌器**①**を收容するプラスチック製密閉容器**②**と捕獲回収装置のA室へ餌を落とすダクト**③**で構成される。